



双塔

カトリック新潟教会

2018年10月
No. 365

イエスと隣人（三）

協力司祭 鎌田耕一郎

（イエスと罪びと）イエスの憐れみは、心の病である罪に悩む人々にも限りなく向けられていた。ひとりの罪の女（ヨハネ8・1以下）を通じてそれを眺めてみよう。モーゼの律法によって状況は決定的であり、女は石で打ち殺されなければならなかった。女がイエスのもとに引き立てられたのは、もし寛大に扱うなら掟に背き、掟に従うときには慈悲に反するというジレンマに追い込むためであった。

「イエスは身をかがめて地上に指でものを書きはじめておられた」。それは人々の罪や（ヒエロニムス）、または掟の言葉（出エジプト23・1、23・7）を書き記した（モンステルレ）と想像する。だが「人の子は、この不幸な女が恐ろしさよりも恥ずかしさのために気絶しそうになっているのを知っていて、その方を見なかったのである。ある一人の人間の生涯のうちには、最大の慈悲はその方を見ないでいてやることであるような時刻があるものだからである。罪人に対するキリストの愛のすべては、このそらした視線のうちにこもっている」（モーリヤック）という方が真実に近いように思われる。

イエスは身を起こし、「あなたたちの中で罪のない人がまずこの女に石を投げなさい」と言われた。人々は去り、「私もあなたを罰しない。行きなさい、これからはもう罪をおかさないように」と告げるのである。罪を望まないが、罪人を赦す神の愛のみ言葉は感動的である。イエスは罪を犯す人間性の弱さと惨めさを憐れむと同時に、その同じ人間性に大きな信頼を寄せるのである。

（イエスと善意の人）イエスは少数の弟子たちに囲まれて閉鎖的環境の中に過ごされたのではなく、すべての階層の人々と親しく交わり、自然に振る舞われた。それは百夫長（ルカ7・2）、王官（ヨハネ4・46）、税吏ザアカイ（ルカ19・5）やニコデモ（ヨハネ3・1）にまで及ぶものであった。ユダヤ衆議会の議員であったニコデモに注目してみよう。「おまえは、なんてニコデモなんだろう」という時、それは質問好きな、こっけいな愚鈍さに対する侮りを含む言い方になっているが、ニコデモは正直な、心のまっすぐな善人だったと思われる。彼はタルムドによると「イスラエル全体を十日間養うことが出来るほどの大金持ちであった」。

噂に聞く新しい預言者と言葉をかわしてみたいと彼は望んだ。おそらくその身分、職業、そして内心の臆病さなどのためであろう。用心深く夜に訪れている。その質問には、礼儀正しいいんぎんさんと共に、固執観念から飛躍出来ぬために示す物分かりの悪さがあらわれている。「あなたはイスラエルの教師でありながらそんなことも知らないのか」と、イエスを嘆かせているくらいである。だが、それにもかかわらずイエスが彼に対してその教えの要点である「新たに生まれること」の秘義を説き明かしたのは、彼の素朴な言葉と善良さに満ちた目がイエスを見つめていたからに違いない。彼の心は動かされており、夜明けは近づいていた。後に彼は会議の席でイエスを弁護し（ヨハネ7・51）、その葬りのために、没薬と沈香を準備したのである（ヨハネ19・39）。



そよかせ便り



■ 9月の英語ミサから ---- 9月2日(日) ----

毎月第1週は正午から英語ミサを捧げています。昨年、フィリピン出身の信徒を中心に4人の聖歌隊が結成されて、教会歴に合わせた選曲をしてくれるようになり、また聖歌も随分明るい曲調のものが選ばれるようになりました。9月は初めて、ミサ前にアレルヤ唱を練習。ミサ毎に替わる唱句の部分を音楽に合わせて歌ってみることに。聖歌隊の面々は、毎週9時半のミサにも参列し、時々ミサ後に聖歌の練習をしたりして、自主的に活動してくれています。今日もギターの音色が聞こえるかな？
(国際協力部)

■ カトリック新聞社・松浦神父様来訪 ---- 9月9日(日) ----

教区の広報担当者との会合のため来訪された松浦謙神父様(大阪教区)は、新潟教会で9時半のミサを司式し、「語らいのコーヒーコーナー」にも立ち寄られた。神戸出身という松浦神父様を囲んで、新潟教会聖堂のことから1964年の新潟地震のこと、阪神・淡路大震災のこと等の話題に花が咲いた。この4月から「カトリック新聞」の編集長をされているという神父様にお話を伺った。

1923年創刊のカトリック新聞は、日本のカトリック教会唯一の全国紙。①信者の霊的な助けとなるような紙面づくり、②広報紙として、国内外の教会の様々な出来事や情報を伝える紙面づくり、③身近な新聞になるよう、俳句や短歌などの投稿欄を設ける—という編集方針のもとに紙面づくりを心掛けていたとのこと。教皇様の動きなどの外電については、CNS(Catholic News Service)と契約を結び、ニュースを翻訳掲載しているという。週刊であるが、毎週発行するためにスタッフ6名がフル稼働している様子を伺った。

カトリック新聞社では新受洗者には5週間、それ以外の新規購読希望者には4週分を試読期間として無料提供している。希望される方は申し込み用はがきで申し込みを。なお売店でも取り扱っている。

■ 敬老のミサと三崎神父様霊名のお祝い ---- 9月16日(日)9:30 ----

9時半のミサの結びに、翌17日が霊名の記念日である三崎神父様に霊的花束が贈呈された。神父様は「本来ならば皆さんと一緒にミサをささげたかったが、体力的に難しくなった。せめて祈りによって司祭職を果たしていきたい」と、お礼を述べられた。会場をセンターに移し、90歳の鎌田神父様と86歳の三崎神父様を交えて、和やかに茶話会が開かれた。唱歌「牧場の朝」「野菊」「山小屋の灯」をみんなで合唱すると、その歌声に刺激された青年と元青年が飛び入りで「上を向いて歩こう」を合唱し会を盛り上げた。最後に、1月の腰の圧迫骨折以降ヴィアンネ館で静養されていた鎌田神父様が、久しぶりに信徒の前にお立ちになり、お元気な語り口で「エマオの弟子」について説かれた。そのご快復を皆で喜び、嬉しい秋の一日となった。

あ ゆ み

No.92 小教区評議会

講座「知ってるつもり?! 典礼のしるし、ことば、動作」

指 導 主任司祭 ラウール神父

開催日時 2018年10月14日(土) 午前10時～11時

会 場 カトリックセンター研究室

※ 『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』を手掛かりに典礼について学びます。
どなたでもお気軽にご参加ください。いつからでも OK です。

カトリック新潟教会 月刊「双塔」 毎月1回 最終日曜日発行 編集・発行/カトリック新潟教会 小教区評議会 広報部

〒951-8106 新潟市中央区東大畑町通一番町656 TEL:025-222-5024 FAX:025-222-5054